

常山紀談

十六

函 番 號	上 / 號
種 別	圖
種 番 號	3228 號
日 入	月 日

919.5
338
Vol.16

備前藩湯淺先生編輯

四帙

常山紀談

書肆

千鍾房
宋榮堂製本

常山紀談卷之十六目次

一 浮田秀家八丈鳩へ配流の事

一 小早川隆景遺訓の事

一 佐竹義宣國替此事并車野丹波の事

一 杉原常陸智勇の事

一 前田慶次が事

一 出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事

一 伊達上杉陸奥國松川合戦の事 附 永井善左衛門岡野丸内

一 が事

一 石田が子比僧助命の事

一 越後國一揆堀直寄武功の事 附 千利休が事

滋賀縣立常山
學校藏書印

一 佐伯太兵衛 伏兵を知る事

常山紀談卷之十六

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○備前中納言浮田秀家八関ヶ原の時一萬八千を帥らまじりて軍
 敗まじりて近江の伊吹山ふかり落らまじり美濃の白檜村ふかり
 かくまじりて有し子遂に忍びて西國に落下り薩州に著まじりて
 其事聞えり 東照宮死罪一等を宥めさせり八丈嶋に
 ぞ流されりやまじりてや小若みく菴作あをる戸は雨もたまに
 風もぬせりバ黒木此柱を削りて書付らる

めを焼くまじりて八浦風のときをうりあやむごとくへん
 其後芳烈公光政朝臣備前よむりて比兒嶋一説西大寺村の商船風
 吹れしよして八丈嶋よむりて秀家九十餘までながりて居

ぐくく一途づてにさうく折しつゝはまゝやとく折るゝ兄弟
心を回くくく相親むと遺言せしむる隆景其時争ハ
欲より起アらん欲をやめく義をもちふは兄弟の不和はうと
いふまうらば元就悦びく隆景の嗣は従ふべしといふれとぞ
秀吉九州を討平けらまうく後筑前五十万石を小早川にあて
らまうふ隆景これハ吾ふる事なり此頃やと敵なり
身小大國をあてらまうハ吾を愛せしむ非む九州をあつえ
為のかりに謀よとせむく秀詮は國を譲り備後の三原ふり
このまうらば

○佐竹右京大夫義宣の士大将車野丹波八剛の者あて白練に
火の車を書き指物とて関ヶ原の乱は義宣上杉と心を合せし

まうらば

義宣四方の軍をひきよめ水戸の城を武多河郡に到るこれ
上杉の加勢は為なり然も父常陸公義重ハ徳川
家は心有りらばあひく誹めらまう義宣も兵を水戸に
返されしとぞ

伏見ゆき義宣の八十万石を六十万石削らまう出羽の秋田二十万石
賜アまう若しあむなむ其終討亡とべき体あまは義宣北國
を誣く秋田はあひしきまう水戸の城を奪ひとれとく本多正
信名向ひくる時車野組は付し士六人と俱不物具し新羅三郎
より傳へし城を人は授んるを口惜まし我とあむをん人々
ハ城を死ね死ねやと叫はり城中はかけ入しを大手あて本多

等大軍ヲもておろしヲみ生捕ヲく磔ヲみかけ火ノ車ニ此指物ヲをくレ添ヲくレと東照宮ノ御物ノ諸の序ニは篤実ナル人ハ世ニ希シくシと歎クせめひニたり

駿府ヨリく東照宮御物諸の序ニは篤実ナル人ハ世ニ希シくシと仰セられ年ノ光ニめシても多クハ足レば佐竹義宣其人ナリと仰セらまシく永井右近ノ大夫直勝ニ兼テていハるルあリやと申スと
因リ召石田治部ト七人ノ大名ト大坂ヨリ争論ノ時ニ義宣ト三成トのめヨりキこシみ有リな三成ヲを打具シ伊見ノ来ルアレ後三成佐和山ニ歸リ時七人ハ此面ニ道ヲく封取ベしと
つクもシ三河守ヲを添シくシふ義宣三成ヲを封シせシと
生ケひナくシて道ヲはレの笑ヲを知リ其身ハ物具シて告ス

来ルを待テく打出シんと用意有くシて是篤実ナルあリばや
関ケ原レ乱ノ時モ大坂ヨリ頼シくシるゆニ吾ハ其ハを告ス
て何方カも組ヲをシりキ逆乱ハ然レるハあリざレども
捨テ難クく先祖ヨリ已来ノ國ヲを削リてシた篤実ナルのよク
き事ヲつク及ビばとシても國ノ存亡ハかクるベき事ハなク
又一思慮有べき事ハやとぞ仰セらレる

上ノ家ノ士大将杉原常陸ハ智勇備アリりシ人ナリ東照宮
宇都レ小山ヨリ引返させシ上杉家ノ軍兵トも大ハいシと
あハりシ杉原獨眉ヲをひキめて大敵ト恐シく引返しシり
とシてハ其人ヲをシらシるハ徳川殿諸將ヲをひキて先上
方ニ攻メり石田ヲを射スまんトすハ八九石田敗ルべシ其時殿一

入りていふで徳川殿は折勝ちのとき敵國は攻入りて引返し
しつゝハ味方此不幸なりとぞ云々

杉原白石の城を守りしといづもの時此事や伊達政宗

不意に押寄る事有り政宗は物見の士をせゆり敵はさぐ

まりと入りし唯町家は火の用心厳しく唯つりい物具

し武者杉原うとむほし城門を開けせ將机おかり

て待居しといひりまは政宗謀有人と恐りて引返され

○前田慶次利大忽々齋と号し加賀利長と從弟なり

一説は利大ハ瀧川儀大夫が妻懐胎し離別し利家の兄

藏人小嫁し前田家は生るといふ

前田の家を立去り

利大ハ文學を嗜みさほぐ藝おも達せり滑稽うし

世を玩び人を輕んどくま利家教訓せし事度ふ

及べり利大息ついたと萬戸侯より心よまうせぬ

事あまバ匹夫も同し出奔せんと獨言せしがはる耐利家は

茶奉るべきよしいひりば悦びく茶次が許し來られ

小茶次水風呂よ水を十分よきとくかき湯風呂のい

入りんやと横山山城守長知をもくいんを利家よかあん

とて浴所よむる茶次自ら湯を拭くよのんといハ利

家何の心もなかくあはれよゆり寒水をせり利

家馬鹿者よ欺まりしよ引來しといをまし慶次松風

しりハ逸物の馬を裏門よ引立させく置りし小打急如

の瓢箪付しを襟まかけ山伏頭中まで十文字の鎧を持
黒北馬よ金の山伏隊中かぐせ唐鍬うけうり前田を次と名
乗るがかりなるまよ水野並塚守佐美藤田四人も同く鎧を
引提げおめたきけんぶ念なく敵を突退けしよ杉原種ヶ嶋
鉄炮二百挺小高た取へおあげうせし物ころれせうば
を次下知し引取り

慶次指物移りよ大おへん者とすうり小人をあしり此
事よといをを次汝うちハ武邊とよしや
ぶまこく貪るまバ大不辨者とりあしこと戯まうりとうや
上杉家祿知削らまうり及士多く暇を取る立去るまを次を
七八千石一万石を以て揺く大名ありを次これ此度の乱は諸大

名表裡の心見限り景勝あでこが主君とすべき人なり
扶持し悉くまよまよとく五百石の祿もく民間より込込風月を
樂しみ歌學よ心をあせ源氏物語を講じて世を終まうり
○上泉主水憲元ハ甲斐の武田北家あり劍術の上よ一水伊勢
が弟なりあまれり者あるが京北相國寺の内よ洛ふま身
をま居しを秀吉の時直江景徳の供して京より傳
へて對面しはめぐ上泉をりてなり會津ハ遠國ありと
景勝三千石の祿ありせんとなりとバ上泉かゝる身よせひ
もよぬ初を養ふして仕へり直江出羽よ押入時上泉も三千
五百の将より宸上方るは山の上より幡屋まで二十四ヶ所よ出
城を設けし直江ハ真直よ山形よすんで攻とんと謀り

くもるは幡屋より春日右衛門よりみある者のかへり忠せ
ん事をいひかゝる直江悦んで山形よりすむ兵を押しめし路よ
かり幡屋よせんとの軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣
を以て幡屋よせん先惣軍ハ山形より攻入るべしと敵我の
利をあへん嶮岨よせん入其ひまの山形の要害を能く謀る
とせむも直江のゆより杉原と中よりとせれば我ハ唯易たよ
就んとく閑入むやがて幡屋を取囲む一時攻よ乗破るなり
一説よ長谷堂より内通の事をいひ送るれば直江大よ
悦び多るを杉原長ハ赤松円心が白旗の城より新田左中將
を欺きて謀ありかくいひ山形ハ要害をかほん
謀なり只山形より攻入るよとせむも用せし長谷

堂は押寄るよ内通の事ハいひせりなり直江欺る

まゝいへり

そまより出城を只一日此中よ二十一ヶ所攻落しはるバ山形よ
押寄んとり上泉が云山形ハ勝るよ要害よく西南ハ沼たの
東北ハ石壁よく柵の木七重の矢倉二十餘所よかへり且義光
先祖より数百年此地よ有士卒よ抱なまて者多し力攻よハ
多しよよ所々の小城数多攻取るよ勇氣を示し軍を
返さるん事然るべしと直江あざ笑ひ軍をかせしハ山
形を攻んとり今更山形の要害よ々々バとく引退くやや
ある汝ハ浅黄志る人の差物さく利根川二本木ハ先陣せり
まゝよより閑東よくを憚る浅黄志る人を指めの

かろしと嘆きしるしふも覺えぬ事をいふと罵られば上泉口惜き
事ありとせひたり直江ハ進んぞ菅沢山陣しり此れも長
谷堂より十九町あり義光も二万餘の兵をひきお山形をかき各
堂の山北尾崎稲荷山陣と長谷堂よは山形の加勢も来て要
害よくれバキヤとく攻ごし討くおの軍ハ危しと制しる
大風右衛門二百射あり切く上泉が陣は向ふ上泉大勢あり
押つみあまきと戦ひくろが大風僅に打ちあき切ぬげく
城は入る伊達政宗も軍を起し先陣長谷堂の城下は押来り陣
を取しり直江ハ大風を討得ざるの残多し此城を唯一時よ打
破しと下知し城際よ攻寄しり直江も死あし打上り石火矢を
透間もあき打懸しり尺千雷の落かす如し志村伊豆舞延戦

前を走る遠く追出りおひ込を相戦し其日も戦ひ暮し
く直江又三千餘を城の後北山の上らせ鉄炮を打つる六城
よりと切く出死傷数をあはれ直江軍兵をさしり四方を焼く
し死す所も軍あり長谷堂の城下は大有る池谷を堰し
て水をせき漕へしと覺し物見の兵を遣し又一陣を以
て焼くし城の中よりひき出八百射切く出しり直江使を以
て引退ししと下知されどもいみ合く引退し使もめしり
帰らざるは次第小軍共行重し銃炮を打合はるる直江杉原
ふとく軍を引上らまよと云上泉我こそ初めといへば杉原進む
八年若死人の業引揚るハ老年の我は協しり同心せしむる
上泉存る子細のいしりもあはれ馬を棄けしり組は付

らまゝ大高七左衛門馬を兼付上泉を引とめ士大将の只一騎
もくかけぬるやうある有べくもなかりしとても耳ゆもやへど
まゝ大高もついでに前田を次守佐美民部上泉が陣より一陣の
大将敵より入るをよそふひくは士の本意は非ぞいづから
まゝついでに進むとてその足をとぎまゝ前田をよそめ二十騎
をり駒向ふ上泉大高八馬より立ち立方面もあつて鎧を歩入
突合するが念をう敵を突退け引取んとする所は政宗の兵三
百計横あひより切つておろくまゝ上泉兼て直江が初を怒り
しりしあま一足も引れどとてひ定めまゝ又合戦を始め火
出る斗ふ戦ひけるが敵味方付く者多し前田守佐美を始め
大剛の者ども数度切つておろくは政宗の兵三十餘人付まゝ

とておろくまゝ政宗の士大将石川弥兵衛崩る味方をめりしり
又打つておろく前田已下立ちとておろくつとておろく戦ひける
直江日も暮かり進むとておろくとておろくと下知しとておろく上泉は
とつひ捨く敵に向ひ上泉主水とつて剛の老打取くと名乗が
け死狂ひし数千人切伏終るとておろくとて討死しとておろくとて首を八金原
加兵衛取つておろくとて上泉三十四歳とておろくとて上泉主水とて曹の真向と
礪波山とておろくとておろくとて上杉勢乱れとておろくとて敗北とておろくとて義
元政宗勝るとておろくとておろくとて追つておろくとて芋川澹殿村上國清四千計
横合よりかゝらんと陣を整へひくはとておろくとておろくとておろくとて
又おろくとて返し追立とておろくとておろくとて石坂共五郎蓼沼日向
前田を次守佐美父子物具とておろくとておろくとておろくとて八ツ折くげ鎧と

突也ぐの刀ハハカささるのめく斬なり人馬を殷よこせしむるが上哀
分強の拒へしる前を急通よして各大將主水をすて殺しをのこ此
交りハあるべし大高七左衛門めく士たりのと罵アしくおるまうり
答ふる人なりりたり

○慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を問者
よしとくもつしを伺まうり松川ハ阿武隈川の枝川めく伊達
領の境なれば本条出羽守甘粕備後岩井備中杉原常陸栗生
美濃岡野左内五千計よしくちりりり政宗ハ國見峠を踰信
夫郡より瀬の上比川を渉り五千の兵よしく河川の城を押へ
松川をさして押寄る物聞ども斯と告まハ本条出羽城を
川を渡して戦ふ川を前よしく半途をや打んとりあをう

松木内匠敵不意の利を謀て押寄り味方川を渡りて待りけ
るば政宗とひいふさぐひく必引退くべらあり川を渉らるる
よろりたるありつふ栗生同心をば此川中窪よく極めて渡り
事きとやけり政宗とて人処を半途を打り利あり人岡野
いやく敵大軍なり爰は待人ハ敵を恐るるも似たり勇士の
志ありけりばとく川を渡りて待設せんよと云栗生孫子小以少
合衆是日北とりのあり小勢よく無謀の軍せんハ大敵の掬
とありんハ必定なりとりあをふ小甘粕備後杉原常陸もと各果
てまら物見をかせしとく猪俣主膳本庄段右衛門井筒小隼人
兼行く馳帰る猪俣ハ政宗川を渉らドといふ二人ハ政宗川を
渡さん事半時計りやありんとり子細を問ふ猪俣敵馬の香を

取む障泥をそがきば羽壺を常の如く附くといふ井筒本庄
が云我ホ名了もも回くゆさんども政宗いもも来らば其間五六
町計もやららん政宗川際よ押多て其支度せんよ何の時刻を移
とくま且小荷物を遠く引退れば戦ひを拵く敵たより政宗
二萬の軍兵を帥く寄来て空しく引退ればやんといふあさ
バ川端二町計並く陣を整へく敵を待んとりよふよ岡野ハ切
支丹を信ずる人たるが南蛮人の贈アくる角栄螺とりよ曹を
署真先くけく川を打渉きて粟生甘粕川を渡るべしと
下知たもども布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門平
漆計まじりく川よ入打渡して守佐美民の鎗を拵く
ある兵をば押とめてりりかまば政宗押来て先陣片倉小十

即透間もろく切てかゝる岡野四百斗志丸ありく鎗を打入
面もろくおめたきけんを戦ひくれども大軍小取かこまれ左
内僅小打あきまき切ぬけく引退く北川馬の首を立直し小田
切よ向て唯今付死せん會津よあしん十四歳ある吾子を囑し
よ是をかきみ又送りくくまはりく握を皮の羽折を腕で
小田切よ渡しく小田切若万死よ一生を得たはたし不送
アんべーとて羽折を腰よまきまき北川今ハ名ひ並事ありと
て追くる敵の中よかけ入く切死しりく是をくめとじ
く帰し合せ火をぬく戦ひく者多し政宗勇ま
進んで追うけく小岡野握々皮の羽織るく鹿毛ある馬
小乗り支へ鞍ひくを政宗馬をかけあせ二刀切る岡野あり

願て政宗の曹此真向より鞍の前輪をうけく切付かへん太刀小
曹の志ころを半うけく研をらよ政宗刀を打折くくまは岡野
すくさば右の膝口は切付く政宗の馬飛退てくれバ岡野政
宗の物具以の外見苦くくろく大將とハなひもよめは續いて
追詰かろく後小政宗なりとゆき今一太刀少く討取べき小
とて大は悔くくあり岡野ハ川へ乗入く小政宗又十騎
手あく追うけ来アきききき呼りくまは岡野あり
かろく眼の明く剛の者ハ多勢比中へかへさぬのぞとい
ひくく乗上り宇佐美兵左衛門十六歳松川の向ひ
の岸く危くくバ父は民部馬を川小お入り栗生い
一先ハ川を渉る者も止る事ア何事小渡さるや名將

の宇佐美駿河守の子息うはいりよと向ふ民部謀も心より出ん
あまこく一子に兵左衛門向の屋中くをやらぬべく見
ゆきバ心の乱まきききき終らば川を渉て打連て引
延きて栗生ハ陣を整へく待りくまは片倉が軍兵を追崩し
川又追ひききき大軍入る内よ重ア攻めくバ上杉勢
ハ福嶋を市して引退く福島よゆく行程めあつ政宗くくてもあ
まはあと馬煙を立く追うけくは物具を道に捨る事敷を志
らに息ききて行倒まきき者もあり持鎗の長た柄ハち堪が
くく多く捨るとぞ青木新兵衛永井善左衛門を
永井善左衛門ハ世々徳川家よ仕へく小田原の城を囲ま
後いよあま有けん蒲生氏郷よ仕へ其後上杉家よ奉

公ミコ一ヒトりもモもモ剛カウの者モノ少シく奥州福嶋口アウチウフクシマノクチも物見モノミ
よ只一騎ヒトイサ出デたりし伊達政宗イダテマサムネの伏兵フシヘイ六人起オキて丸包マルツツを
四人討取ウチトルり長篠ナガシノもも太刀打タチウチり首カビをカらカり右の
指ササ手テ負オヒ刀カを取落トリオチせし敵テキを追結オツクメて又討ウチえし
わづの物師モノシなり其後其疵キズを向ムカへバ馬ウマふくハまシり
答コタへしコぞかコのコ功コウふコぬコ人コなり後御旗本コノミチノボ
歸カり仕シへく御旗ミチノボを司ツカサむ善左衛門浪人ゼンサエノナリもく上州深谷カミチカヤ
閑居カネキして有アりし時人トキノヒトのりし瀬戸セトの茶入チャイを秘藏ヒサクせし
小下女コゲメを落オチして打破ウチワりぬ下女ゲメ驚オドロたコ鏡臺キヨウダイより
五倍子ゴバイシを入イる壺ツボをトり出デし是コノもかコらコり小奉コホウらコ
り用ヨウも立タぬコり力チカラなコまコも是コノを精取セウキしぬ後小堀コホリ遠トホ

江守エノミ見てミを打ウチく是ハ唐物カラモノの肩衝カタクツなりと称美タテマヒし
後ノチよ公ミコ小奉コホウりしち板倉イタクラ勝重カツシゲ懇ネシヨありし
家ケ御ミよりコりし御上京ミカミヤウ此コノをり京キョウへ来キらコりし
いひ越コヒまりし深谷フカヤを歩アり平安ヘイアンに趣オモムく時浪人トキウニなりとも
あひかり名護屋ナゴヤ親族シンゾクのりし立タちぬ像ヒニの俱トモあひ
ける浪人ウラニ巴オ刀カを永井ナガイが指替サシカ此刀コノを取替トリカへかけ落オチぬ
永井ナガイせんりし京キョウより後死罪シサイの者モノ有アりし研師トギシ又マタを付ツ
て刃ハを付ツきすもふさびて金色カナイロも見ミえコらコり研師トギシ又マタを付ツ
く此刀コノの如ゴトシ刀カ此刃コノハ曾カウりし心ココロ覺オホえコらコり斬罪ザンサイの場バおて
ふら身ミの者モノ有アりし切キきざりしにかの永井ナガイがコらコり刀カあコ
切キりし物モノ障サハり事コトあコらコり似ニし能研ノウケンくコらコりバ

はしきまらざる物ゆく銘ハ正宗と切り本阿弥よすれ
ハ正宗の中にも好小最上の物なりといへり是も
家子奉りて永井正宗と号せられしなり

始とて大剛の老ども馬を走らしめハ追ちりしとつと
てい突ちりし後殿しあり青木ハ小丈あるる小乗柄の短き
鎗ありしを殊に急ぎたり幾度とたなく支へ戦ひたり其相備
後ハ上杉家より勝まり勇將あるが白石の城をせりし會
津へ行きて跡ゆく登坂逆心し白石を敵に取まり事
を口惜く思ひしに今日とりて死にけり取てか今七
追退け勇氣をあらしめ福島の城下北川を渡り時政
宗の兵跡追詰りし先ず川よお入るるが永井を後よ

三刀切る永井度々の軍に戦ひ疲まし大軍打渡り川音よま
まれ此をよる青木ハ鳥毛此棒のゆりゆく黒たむらけ
しるる乗ちり敵を追拂ひ川岸小打あがりて永井は斯や
りどぞ驚たてて従者よんすまじバあち小三刀鞍ふも刀の痕あ
り永井は六助けらるしとて一禮をぞ述べりたる小田切と
敵よる困るありや付まらぬとるるを青木又かけきて敵を
追拂ふ岡野ハ旗し立く静に福徳の城よ入其粕栗生も引
入らるるバ政宗やがて押寄しり殿此兵ども柵を踏く城小入
しりし青木ハ柵を越りし只一騎ひう居るる小政宗馬
を駈ちりし青木十文字の鎗あし政宗此由の立物三日目を
突折しりば政宗馬よ諸鎧を合せりわけ通らるる青木後

政宗と争ひて今一鎗ゆく突殺せむと口惜き事なりと云ひ
りるかゝるもは藻川の城より須田大炊助長義討ち出政宗の
兵阿武隈川を前陣しるが此川奥州第一の大河あらも
須田ハよく地の利をとり兵を二陣よりち須田ハ川上小舟上
アツクをりて政宗の兵二ツ分まて防ぐんと色めく水を一
文字不渡しく斬る敵敗北しる物具を始め多く分
捕せし中も伊達家小侍へ幕を須田宇平次中村仙右
重つ奪取てり須田今年二十三のまより武名殊ふせ高
く閑えり政宗ハ松川ゆく後敵出りて引退く怒を
本庄越前又かけゆく川を渡し追うけくまバ政宗敗北し信
夫山は掛アしく引退く時景勝後巻小打出く緋地は日の丸

旗山の上に見えり政宗と物もとりあへば仙臺小引と
まかり後小政宗使を以て攻取る白石の城と幕と取換ん
と云送らるるは景勝ゆく白石の城ハ鋒ゆく攻とるは
幕も亦吾士卒の骨折る取得るハ重く幕をも鋒めて取返
さるるは後小城一ツ攻落さるるハ恥はあはれ昔
より名將も城を敵に攻落さるる事あはれまはれ武具を
取まらるる事ハ弓箭とる身の大きる恥たれば政宗我をまら
るる斯云くたのまると笑はるる
台徳院殿上杉の館に
御出有し時かの九曜此幕法華經の幕を脱はるるれと
ぞ其後政宗岡野より入り時松川の軍に有松語りて
く汝を斬つるハ必ずしもおをとりては岡野大將の

刀の跡と存りて金糸よして縫あそ世家の宝とせんしと存るはし
いひく羽折を政宗に見せられバ政宗悦むる其時岡野曾の志
ころを吹返しけりなぐり切はまきりきと申さるバ政宗色
を變り物語を止らまじと云

岡野ハゆや蒲生家の士なりしが上杉家よ仕合り富
有ちる人少く儉を好む奢をゆくむ一月の間二三度も金
銀を山の如く積て其中よ卧くなぐりみたりるをゆめ
人そよとあへり或時岡野より此如く金銀を並べて見
居たりし近きゆりの士あそそひを志知し方人の者
どもあまのこかけあてたまはれり又岡野ゆめといふや正宗此
刀を授てまじり一日一夜其家よ有る事能とんあつて

て歸アたり出野が馬取の下給大板金一枚持たりと云
及び呼出して汝が志こそゆくしと云人ハ貴賤よよくば
貧くしてハ義理のたぐべき事も心をくりりて叶ひざし
よく心づけりてと云て黄金百兩與へたり景勝會津よ
兵を起す時永樂錢一萬貫文を獻し朋輩の親し深き
人よふハあちと黄金をとりて送りて軍の志よくふ人ハ
ひりめたりと云ても岡野ハ猿樂よ舞をどれとくさるが人
よ語ると日比ハ武備よねとて猿樂とも世のゆめと云
時ハ諸方よまじりて暇なり今人々あそとてまじりてかの
者どもいふゆめあまのこ遊びよまじりて軍よ臨む者生て帰
らんと云はれされバ今生の樂よと云ひくたぐりて

ぞ云々又政宗福島フクシマの城を攻とらんして木幡コハタ即左馬
百騎討ふく城近チカく働ハタきたり岡野井樓セイロウより見大物見
あまきと三陣よこりしハ軍を心あしり兵をせむべ
らばといひくふ鈴木彦九郎スギキよせ来り申よ政宗有べ
しひとめく討取んとしハ丸マルこくと兵をせし先陣二十騎
討次の陣よひつふたんとめく西を鉄炮テツポウを打け煙
の下タあ左内サナイ一文字よ切掛と遂ツヒよ木幡コハタを討えられ景
勝度カサの功を賞し讓信武功ケニシニフコウの聲トモカサ小姓名セイメイをあえらる例
あより左内サナイを越後エチゴと更められり政宗三万石よてあひり
まららども舊主キウシュの好ヨシと忘ワスまごころとて蒲生秀行カマフ小仕コシへ猪
苗代ナメの城よ有下野守忠郷シモノノサトの時死トキシらるが金子三千両正宗
の刀を遺物イモノ小献コケント忠郷チウキョウの弟中務チウボウあも金子三千兩景光
此刀貞宗サダムネの小脇指コワキサシをかきみよのせり年頃トシコロ人あひ
くる金銀キンギン此手形テカタ證書シヨウシヨの大ある箱ハコあひしを皆焚ヤキまらる
ころりし我

○関ヶ原セキガハラの亂ミヤウラをきまりて後 東照宮トウショウミヤ本多正信ホンタマサノブを召メシて石田イシダが
子妙心寺コウミョウシンジ此内永壽院コノナニョウジュインが弟子テシやく僧ソウとなりしを寺テ中チウ一イチ回クワて
重罪ジュンサイの人ヒト此子コノコあまきとも幼コき時トキより出デ家ケしる者モノあれば救スツさ
まらへといわいふと仰オホシ有リきまバ正信マサノブとくも御救ミケツされの有
べき事コトよ治部チブハ徳川トクヱンの家イヘよ大功ダイコウをたのしむ者モノあり治部チブよ
しまた軍イクサを起オコし西國サイコク中國チウコクの大名ダイメイをかきひひし一戦イチセン
よあ負ウツく故コトあてて日本ニホン六十餘州ロクジュウ皆徳川家トクヱンよ帰服キフクし

之治教が存立しよりかく日本ハ從ひぬまきバ徳川家子大功を

成しよふハハハハヤと千々多きバ 東照宮汝が理屈もささるる

なりと仰らまてくかの僧御ゆゑこれを蒙アられバ岡谷美濃

守宣勝懇よして和泉北岸和田よて終りけるしとや

○関ヶ原の乱此時越後小一揆起巴堀左衛門督秀治が臣小倉

主膳が下倉の城を責る堀監物が子丹後守直寄坂戸の城

わくかくて後卷よかけ向ふを敵引とがへて坂戸を攻は

如何あんと云りの有直寄いまご下倉を救ひ敵此城了

攻来らば敵此旗先をさす小見ぞ口惜くまべしといわより

やく打出て下倉に向へバ小倉も門を開て切く出直寄後より

一文字は突おつり一揆此長田丸右京を打取ると此告を坂戸

あて書きたる附勝利を得んとませしとバいふあんとりふ直寄

あざ笑ひ打まげバ戦場の土とたると云き出まるとり一揆

柿崎齋藤已下五千計 杉山より前子平田をめて陣にこれ

バ直寄昔太閤の前より允長老の孫子をとまるとをゆくと兵

以正合以奇勝とつり吾々奇を以て軍とてしとて山中教馬

速水織終よるとを渡り直寄ハ六百計引分て林の中は

待居より一揆馬印をらんと進と来る附林の中よりとつとを

出直寄真先よすくみく思ひもよぬ不意を討一揆二百餘

討取く切崩しとて 東照宮御感状を賜ふぬ此年二十四才

とて後ふ十方石を賜ふとて

直寄ハ秀政の長臣堀監物直政の次男あり十三歳よて倍臣

そまづく小形見をわらちやきて後自害しけるとぞ

直寄幼少の時紙でこ土でこむのまやうの物を残びく人の贈る

あも他のもれハ悦びばさまバ人ごとも贈るやむよ大あも藤よ

入て有しを人々あやしく思ひたる小常よ人あれたあよかのでこを

並べ武者押陣取をしく戯ま悦びしとぞ

○越後の一揆三条の城よ家ある時道よ伏兵しり溝口伯耆守

宣勝兵をわしく三条よ赴くよ世間太兵衛先陣せり小川

の脇よ新しき糞の有をえんて此邊よ糸を伏置しるなんとぞ

搜しるもバ伏兵駭きまく逃ぐるを追うけく百餘人討取しり

とてまじく小形見をわらちちをて後自害しやとて

直寺知少の時紙でこ土でこちりまやりの物とたびく人の贈

少も他のもれい境ひんを六人てて贈りたるちよよ大なる藤

入て有しを人とあやとるひさる小常は入るるあひよの

事い大者い陸軍としく歌と悦びりて

○越後の一郡に木の葉まきし時遠く伏兵くくり溝口の

宣勝兵をせしむるにたてて世間本まはれりて

の勝と新しき事ありて此處にたて置し

授けしむるに伏兵ありて

昔に...

...

